元の大都における仏寺・道観の建設

――大都形成史の視点から――

渡辺健哉

はじめに

これまでに筆者は、大都の形成に関しての研究を進めてきた。まず、大都の西南部に位置する金の中都が南城と呼称され、大都城の補完的機能を果たす都市であったことを明らかにした。元末まで多くの人が居住した南城は、大都城の人々にとっての憩いの場所でもあったといえる。[1] ついで、至元二十年に発令された南城から大都城への税務官庁・商店・官営工場の移転規定の分析を通じて、商人を通じた形で大都へ物資の集積が図られた状況を解明した。[2] そして後述する至元二十二年に公布された移住規定をきっかけに、南城から大都城へと住民が移住していく。さらに大都における科挙に関わる様々な行事についての検討を行うなかで、大都城の開発の方向が南城に近かった西南部より中央部に向かい、そののち東西方向に展開していくのではないか、という見通しを提示した。[3] 本稿もこれまでの論考と同様、筆者による一連の大都形成史に関する研究のひとつに位置づけられるものである。具体的には、宗教施設の建設を通して、この最後に触れた見通しについて改めて考察したい。

大都城には太廟や天壇に代表される国家による祭祀施設のみならず、仏寺・道観（以下、本稿においては総称して寺観とする）などの宗教施設も数多く建設された。こうした寺観が単なる信仰の対象にとどまらず、様々な機能を有したことは改めて述べるまでもなかろう。

これまでの研究により、宗教施設の果たした役割やそこで行われた儀礼、そして建築学からみた内部構造については明らかになりつつある。[4] しかしながら、大都に置かれた寺観を網羅的に検討し、なおかつ、それを大都の形成過程に位置づけて検討した研究はこれまで存在しない。本稿で

は、寺観の建設を通して改めて大都の形成過程について論じてみたい。

具体的には以下のように検討を進めていく。まず寺観の数を確認し、そのうえで建設場所と建設年代を材料にして大都形成史について考えていく。ついで、寺観の建設にあたっての背景とその機能についても論じる。特に、以前の拙稿で見通しを立てた、大都城の開発の方向性について考え、最後にそれが何を意味するのかについても述べたい。

一　寺観の建設年代とその場所

まず、大都にどれほどの寺観が建設されたのかについて確認をしていこう。この点で依拠すべき史料としては、『析津志輯佚』「寺観」、『元一統志』巻一「大都路」、『大元混一方輿勝覧』巻上「腹裏、大都路、大興府」、『永楽大典』所引『順天府志』が挙げられる。[5] 加えて個人の文集に残されている題記も加えられよう。ここでは、古典的研究ともいえる王璧文論文などにもとづいた、王崗『北京城市発展史(元代巻)』の「表2　元大都仏教寺廟一覧表」と「表3　元大都道教宮観一覧表」に依拠しつつ、[6] 筆者自身の調査も踏まえて検討していく。

まず、仏寺は百四十三、道観は九十を数えることができる。それらについて、①南城に建設されたもの、②大都城に建設されたもの、③城壁に囲まれたこの二つの空間の郊外に建設されたもの、④所在不明なものの四つに分類すれば、以下のようになる。

	仏寺	道観
①	96	65
②	31	13
③	9	5
④	7	7

ここから理解されるのは多くの寺観が南城に建設された事実である。すなわち、拙稿で詳論したように、[7] 南城が都市としての機能を元末まで有していたことを改めて裏づけられるであろう。

ついで建設年代について考察する。これらの寺観のうち確実に元代に建設されたと分かるものは、仏寺が三十五、道観が四十である。これについても、そのほとんどが南城に建設されていた。

大都城に建設された寺観のうち、工事の着工年代が元代と確定でき、加えて場所の特定が可能なものを、その建設年代に沿って並べていくと以下のようになる。史料の典拠は省略したが、主に王璧文「元大都寺観廟宇建置沿革表」に依拠している。なお、次々頁には、以下で確認される主な

坊名だけを記した【大都城図】を参考のために付しておく。適宜参照されたい。

世祖期

崇真万寿宮（蓬萊坊、至元十五年竣工）／大興教寺（阜財坊、至元二十年）／無量寿庵（寅賓坊、至元二十一年）／大聖寿万安寺（福田坊、至元二十二年）／大崇国寺（発祥坊、至元二十四年）

成宗期

千仏寺（金台坊、元貞二年）／雲巌観（集慶坊、大徳元年）／大承華普慶寺（太平坊、大徳四年）／大天寿万寧寺（金台坊、大徳九年）

仁宗期

興福頭陀院（保大坊、延祐五年）／能仁寺（咸宜坊、延祐六年）／妙善寺（咸宜坊、仁宗期）

英宗期

万巌寺（居賢坊、至治元年）／大永福寺（福田坊、至治元年）

文宗期

大興国寺（蓬萊坊、天暦年間）／順聖寺（咸宜坊、文宗期）／五福太乙宮（和義門内、至順二年）

順帝期

天台法王寺（金城坊、至正三年）／福安寺（居賢坊、至正期）／法通寺（金台坊、至正期）／半蔵寺（集慶坊、至正期）

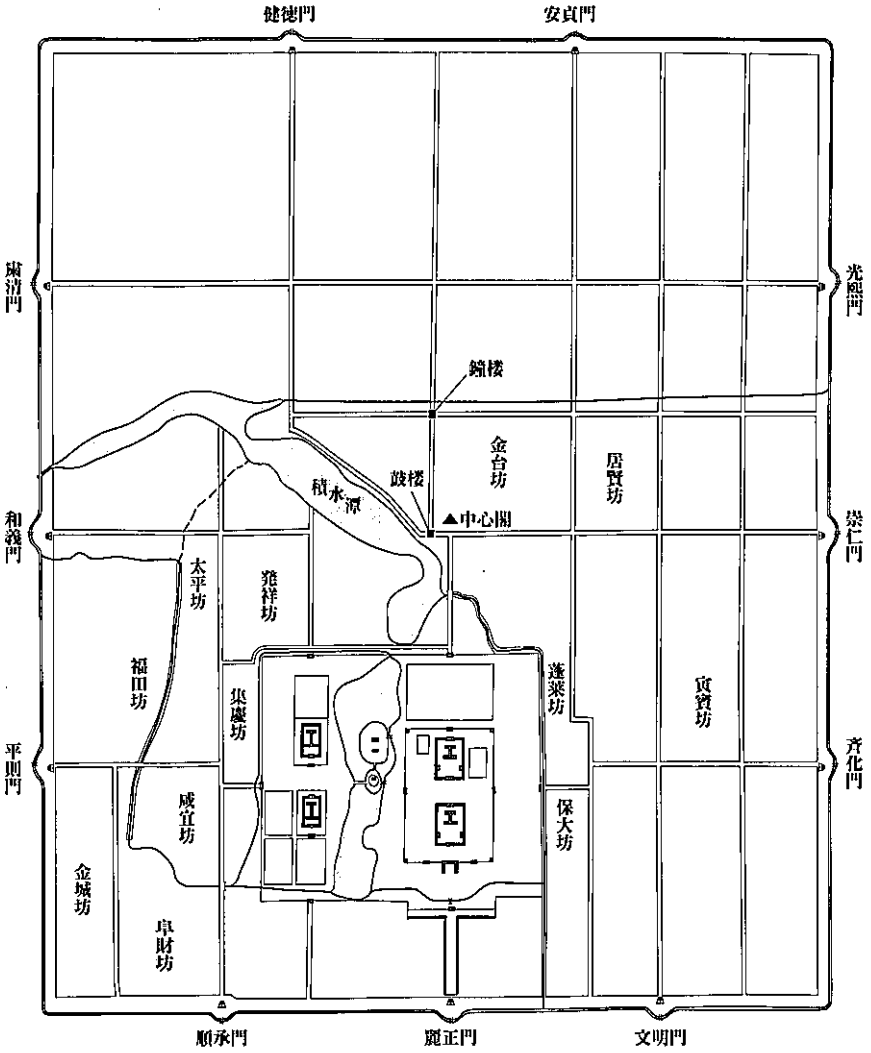
一応念のために、建設時期が特定できぬものの、元代に建設され、かつ場所が特定できる寺観についても挙げておく。

石仏寺（金城坊）／帝師寺（金城坊）／報恩寺（斉化門内）／華厳寺（枢密院南街西）／法蔵寺（金城坊）／天竺寺（金水橋西）／文殊院（安貞坊）／崇聖寺（咸寧坊）／極楽寺（国子監附近）／円恩寺（昭回坊）／十方洞陽観（思誠坊）

このうち、崇聖寺と極楽寺については、それぞれ「至元五年」、「至元年間」の建設ということは史料より明らかではあるものの、[8]それが世祖期にあたるのか、それとも順帝期にあたるのかが不明なため、敢えて外した。サンプル数の関係から、完璧なものと言い切れず、あくまで目安としかいえないが、この材料からだけでもある方向性をつかむことは可能である。以下では、寺観が建設された場所と、建設年代について確認することによって明らかになる事実を指摘したい。

まず場所に注目するため、便宜的に皇城を中心とした三つのブロックに分けて考えてみよう。積水潭の南に向かって広がる空間を皇城西側の区画とする。崇仁門を起点として西に延びる崇仁街より南側の空間を皇城東側の区画とす

【大都城図】



※本図は、侯仁之〔編〕『北京歴史地図集』（北京出版社、1988 年）「元大都」をベースとし、既存の研究にもとづいて、いくつかの坊名だけを地図上に落としたものである。ただし、位置の比定は難しいもので、厳密な比定ではない。

る。そして中心閣より北側の空間を皇城北側の区画とする。なお、大都城は皇城が南に偏在しているため、皇城の南側は考慮しない。はじめに数を確認しておけば、西側が十四、東側が七、北側が七となる。とくに西側に寺観が突出して建設されている傾向を窺い知れる。以下、各区画に分けて考察していく。

皇城の西側については、とくに咸宜坊、集慶坊、金城坊、福田坊などに多くの寺観が集まっていることに気がつく。これはいうまでもなく、冒頭で触れたように、拙稿で考察した南城に近接しているためと考えられる。南城に一般住民が多数居住していることが考慮されて、寺観が建設されたと想定できよう。住人がいるからこそ、そうした人々の参観や訪問を見込んで多くの寺観が建設されたのである。

皇城の東側についてみれば、斉化門から皇城に向かう斉化門街に沿って寺観が四つ確認できる。寅賓坊の無量寿庵、蓬萊坊の崇真万寿宮と大興国寺、保大坊の興福頭陀院である。これについては、大都城への物流と併せて考えなければならない。大都と通州とを結ぶ通恵河が開通するのは、世祖の治世も末期のことである。そのため、金代以来の壩河が早くから再利用され、元末まで利用され続けたことは、かつて拙稿で詳しく述べた。[9] こうした運河のほかに陸路も利用された。陸路は通州から斉化門を経て大都城に通じている。元朝政府がこの陸路を重要なものと認識していたことは、彼らがそのメンテナンスに注意を払っていたことからも窺える。すなわち、泰定三年（一三二六）十月には、「卒四千を発し通州道を治めしめ、鈔千六百錠を給」（『元史』巻三〇、泰定三年十月辛未朔の條）し、至元二年（一三三六）八月にも、「大都より通州に至るまで霖雨、大水し、軍人に勅して道を修せしめ」（同巻三九、至元二年八月戊寅の條）ている。水路・陸路のいずれにあっても、大都・通州間を結ぶ路線は、国都の糧食を維持するために重要なルートと認識されていた。主要幹線道路に沿って自然と多くの人が集まるのは、改めて説明するまでもない。だからこそ、その延長線上に沿って寺観も建設されたのである。

この斉化門の外側には東嶽廟も建設された。東嶽廟は、延祐六年（一三一九）に起工し、至治元年（一三二一）に竣工した。[10] この東嶽廟前の賑わいについて、『析津志輯佚』「古蹟」（一一六頁）には、

斉化門外には東嶽行宮があり、以前は、御香・蠟燭・酒（供える酒？）・紙（紙銭の類？）が最も利益を生んでいた。思うに江南・直沽の海道を経て、通州よりやって来た者は、城外に居住する者が多く、人々がこの地に向かう様子はまるで脇目もふらず自分の家に向かうようであった。漕運によって運び込まれる物資は毎年

大都城に集積され、ここで交易される物品は多く、それによって居住民は物質的にも経済的にも満ち足りた生活を送っていた。[11]

とある。東嶽廟は大都から東の通州に向かう道路に面して建設されたため、陸路を利用して大都城に入城する商人にとって恰好の商業空間になった。東嶽廟が斉化門の外側に置かれたというのも決して偶然ではなかろう。斉化門は通州から大都城に至る陸路の終点であり、斉化門を経て大都城内に進入した延長線上に人が集まると当時の人々が理解していたためと考えられる。[12]それ故にこうした寺観が数多く建設されたのであろう。

最後に皇城の北側について考えてみる。北側で注目すべきは、いくつかの寺観が金台坊に建設される傾向を見出せる点にある。金台坊に関しては、『永楽大典』所引『順天府志』の以下の記述に注目したい。

万寧寺は金台坊にある。元代は城の中心部に相当し、そのためにその閣は「中心」と名づけられた。今（明代）は城の正北に相当する。[13]

つまり、明代北京城の正北に相当する街区が、大都城にとっての中央区画に相当すると理解されている。金台坊に寺観が建設された理由は、まさにここにあるのではなかろうか。都市の中心区画であれば、目につきやすい。質的な中心はその南側に広がる皇城を中心とする空間であったとしても、空間的な中心部に置くことにこそ意味があったのであろう。従って、大都城の中央部に位置していたという要素を持つ金台坊は特別な街区であったとみなせる。皇城の北側についてとりわけ重視すべきは、金台坊の北側に建設された寺観が確認できない点である。つまりこのことは、大都城の開発が中央より北側にまで及ばなかったことを暗示しており、ひいては大都城の北側がいかなる状態であったのかという点においても重要な意味を有する。以上のように、皇城をめぐって西側、東側、北側に注目することでいくつかの興味深い事実を得られた。

つぎに建設時期についても考えたい。少ない事例からの判断であるが、寺観の建設は至元二十年前後から開始されたと推測される。その理由を述べていこう。以前に拙稿で述べたことを確認すると、[14]至元二十年に至って、住民を迎え入れることを目的として、商税税率の再設定が行われた。すなわち、大都と上都についてだけは、商税の徴収を特例的に通常よりも低率にすることを定めたのである。そして、この商税の税率改定は大都と上都に遠隔地からの商人を集めるための措置であったと述べた。これに加えて注目しなければならないのは、至元二十二年に公布された住民の移住規定である。[15]すでにいくつかの論文でも触れているので、

改めて本文を掲げることはしないが、資産が多くあり、かつ官僚身分の者を優先的に移住させる命令が発令された。つまり、住民を迎え入れる基盤を整備したうえで、南城からの移住者を受け入れたのである。そして、その間の時期には仏寺も建設された。無量寿庵について、危素『危太樸文集』巻四「無量寿庵記」が以下のように記す。

大都城の寅賓里に無量寿庵という仏寺があり、それは居士屠君によって建設されたものであった。……（至元）二十一年、自らの資金七百貫を供出して、土地十畝を太廟の西に買い、無量寿庵を造った。仏殿四楹を建設した。建物・仏像は完備している。井戸を深く掘り畑を耕し、手づから嘉木を植えた。[16]

屠某が私財七百貫を投じて太廟西側の寅賓坊に土地を購入し、至元二十一年になって無量寿庵を建設したという。商税の税率改定とそれに伴う住民の移住規定との間に、この無量寿庵の建設が行われたことになる。つまりそれは、この頃になってようやく住民が社会生活を営むようになっていたことを示す。宮城のおおよその完成は至元十一年のことであるが、[17]住民が社会生活を営むにあたっては、一定程度の時間の経過が必要だったのである。

一方で場所と建設時期との関係についても目を向けてみよう。世祖期は皇城の周囲に寺観が点在している。成宗期になって、ようやく皇城の北側にも見られるようになるが、そこは大都城の中心である金台坊であったからに他ならない。注目すべきは、居賢坊に建設された二つの寺観の建設時期である。万厳寺は至治元年に建設され、福安寺は至正年間に建設された。拙稿において科挙にあたって利用された国子監と孔子廟の建設時期を確認したが、これらは科挙の開始された仁宗の治世下までには完成している。[18]つまり、時間を経過すると、大都城の中心部から次はその東西方向に向かって開発が進められたのである。

以上のように、大都城の建設の展開を寺観の建設状況から概観してみた。皇城の西側の区画に多くの寺観が確認できるということと、時期を下るにつれて皇城の北側に向かって寺観が増加していくということとは、大都形成史を考えるうえで重要な事実である。

さて、次節からは大都におけるこうした寺観の意味について考えてみたい。まず、どういった経緯で寺観が建設されていくのか、その背景をおさえ、ついでその機能について考察を加えていく。

二　大都の寺観建設の背景

まず、大都の寺観建設にあたって、それぞれの寺観がど

のような経緯を経て建設されたのかについておさえておくこととしよう。

そもそも、大都における寺観にはどういった種類のものがあるのか。首都であるから、特別な役割を持たされた寺観が存在することは容易に想像される。それは皇帝の命令によって建設されたいわゆる皇家仏寺である。[19] 皇家仏寺については、すでに清代の趙翼がその著『陔余叢考』巻一八「元時崇奉釈教之濫」で注目しており、これに導かれて近年の研究においても言及されることが多い。皇家仏寺は大都城の城内と大都の郊外とに建設された。大都城内に置かれたものとしては、大興教寺（一二八三年完成、阜財坊）、大聖寿万安寺（一二八八年完成、福田坊）、大天寿万寧寺（一三〇五年完成、金台坊）、大承華普慶寺（一三〇八年完成、太平坊）、大永福寺（一三一一年完成、大都城内）、大天源延聖寺（?、太平坊）がある。[20] 郊外に置かれたものとしては高粱河の河畔に建設された大護国仁王寺（西鎮国寺）がある。[21]

右に挙げたもののうち、現在も北京市の西城区阜成門内大街に妙応寺（通称、白塔寺）として現存する大聖寿万安寺が名高い。ここには、いまも北京の観光名所の一つとして有名な白塔がそびえたっている。白塔はチベット様式で建てられた、高さ約五〇メートルの円錐形の仏塔である。この塔はもともと遼の寿昌二年（一〇九六）に建設されたが、ネパールの建築家である阿尼哥によって改築された。この塔の建設については、阿尼哥の神道碑である、程鉅夫『雪楼集』巻七「涼国敏慧公神道碑」に、「（至元）十六年、聖寿万安寺を建つ。浮図初めて成るや、奇光の天を燭する有り」とあって、白塔から発せられる光が天を照らしたという。加えて、『永楽大典』所引『順天府志』が引用する『大都路図冊』には、「国朝此の大刹を建つ。都城内平則門裏街北に在り。精厳壮麗、都邑に坐鎮す」と表現される。広大な敷地と光り輝く白塔を有するこの寺院は大都城のランドマークとしての役割を担っていたといえよう。なお大聖寿万安寺は、元末の至正二十八年（一三六八）六月に、落雷による火災が原因で焼失し、八月には明軍が大都に侵入して、元朝政府は大都を放棄して北帰していくことになる。[22]

すでに明らかにされているように、こうした仏寺はクビライ以下の皇帝の御容を収蔵したため、帝室と深い関係をもつ。それゆえ、建設や維持にあたっては国家から資金が提供された。しかも、寺によっては広大な荘園を所有することさえあった。したがってこのような仏寺は、全国に画一的に建立された仏寺とは異なる性格を有しており、ひいては首都を象徴する建築物の一つと見なすことができる。

こうした、いわば王立寺院ともよべるような寺院以外は

どのように建設されたのか。いくつかの事例を挙げて見ていきたい。

北京市の西城区護国寺大街に位置する護国寺は[23]、元代に崇国寺として創建された。崇国寺を建てた定演は、世祖から「円融崇教大師」の称号を与えられる。至元二十一年（一二八四）に世祖から土地を賜与されて、いまの地に崇国寺を建設した[24]。香河・宝砥・永清・平谷・三河・遵化などの華北や、遠くは杭州にまでも寺産を所有していた。崇国寺の完成後も皇室の保護を受け続け、仁宗期には三千余錠の鈔が賜与されている。皇家仏寺とは異なるものの、元代を通じて皇室からの保護を受けていたという点において、大きな特徴を持つといえる。

皇室に仕えた尼僧が個人の私財を投じて寺院を建設した例としては妙善寺を挙げることができる。『仏祖歴代通載』巻二二は、高昌人の尼僧舎藍藍の事績を載せる。

大都妙善寺の比丘尼の舎藍藍が亡くなった。師諱は舎藍藍、高昌の人である。……成宗の治世下、皇太后に西宮で仕えて、長い間に渡って侍従していただけでなく、勤労と認められる働きもまた多かった。（そこで）詔が下り帝師の迦羅斯巴斡即児（第五代の帝師タクパオーセル）に師事して、出家して尼とされた。……仁宗の治世下、……詔して妙善寺に居住させて、随時皇太后のもとに入見させた。数え切れないほどたくさんの物品を賜与された。師はその賜物を元手に寺を京師に建設させ、寺名を妙善とした。……至順三年二月二十一日に歿した。年六十四[25]。

彼女は武宗・仁宗期に隠然たる勢力を振るった皇太后ダギに寵愛された。その結果、多くの賜与があり、それを原資として仁宗期に妙善寺を建設したという。この妙善寺の場所について、『析津志輯佚』「寺観」（七八頁）には「妙善寺は咸宜坊に在り。沙藍藍の姑姑寺なり」とあって、咸宜坊に置かれたことが分かる。これもやはり、皇室からの保護の下に建設された寺院とみなすことができるであろう。

また、官僚の私財によって建設された寺院も存在する。延祐五年（一三一八）に完成し、保大坊に置かれた興福院については、袁桷『清容居士集』巻二五「興福頭陀院碑」に、「至元中、今平章政事の王公毅・枢密副使の呉公珪・福建宣慰使の李公果、見て之を異とし、始めて今の院地を買う」とある。こちらの場合は、政権中枢を担う官僚たちが後援者となって、世祖期の至元年間に寺院の土地が購入されたということになる。

一方で、高麗人によって建設された寺院も存在する[26]。報恩光教寺は延祐四年に南城の彰義門外に建設された。至元二年（一三三六）八月に執筆された、李穀『稼亭集』巻二

「京師報恩光教寺記」によると、

延祐丁巳、高麗国王諱某は退位して、大都の邸宅に留まり、南城の彰義門の外に土地を買い、仏寺を創建した。三年後の己未の年、工事は終了した。仏を安置する場所や僧侶を生活させる場所、仏事のための器具、(こうしたものが)すべて完備している。額を掲げて大報恩光教寺とした。[27]

とあって、高麗王王璋が土地を購入してこの寺院は建設された。

さらには、高麗人の官僚によって建設された寺院もある。やはり『稼亭集』巻四「大都天台法王寺記」によると、官僚たちが幾人かからの寄進も併せて金城坊に土地を買い、そこに高麗僧である孜信を居住させて天台法王寺を建設したという。高麗の高官による寄進で仏寺が建設された例であるが、付言すれば、高麗人官僚によって土地の取得が可能であったことまで看取できる。

一方、大都には道観も数多く建設された。世祖の宗教政策により、道教教団は大きく発展を遂げ、全真教が大勢力を誇ったこの時代において、その影響は広く大都にまで及んだ。

世祖から土地を与えられた道観としては、太一広福万寿宮が挙げられる。太一教の道士であった李居寿は中統元年九月に世祖から「太一演化貞常真人」の称号を得て、至元十一年十二月に南城の奉先坊に世祖から土地を賜与され、太一広福万寿宮を建設した。[28]

一方で、私費を投じて土地を購入した例としては東嶽廟が挙げられる。[29]延祐年間のこととして、虞集『道園類稿』巻三七「大都路東嶽仁聖宮碑」には、張留孫が「地を大都斉化門外に買ひ、規して以て宮を為る」とある。現在も同じ場所に存在し、前述したように、大都城東側の商業空間の中核を担うこととなる。

以上のように、南城も含めた大都には多数の寺観が建設された。そうしたものは皇帝の命令によって造営されたものを筆頭に、僧侶や教団の指導者、官僚等、高麗の王や官僚の出資にもとづくなど、多様な形態で建設されていったのである。

三　宗教施設の機能

さて、最後にこうした寺観の機能について確認しておくこととしよう。寺観は信仰の対象だけであったわけでは決してない。行楽地としての役割を果たしたことはまず容易に想像できよう。このような例は枚挙に遑がないので、ここでは大都郊外の大承天護聖寺に遊ぶ事例を紹介するに止

める。傅若金『傅与砺詩集』巻二「清明日遊城西詩并叙」には以下のように記される。

大都に住んですでに三年、西山の景色の優れていることを聞き及んでいたが、いまだに行ったことがなかった。元統二年二月二十五日、清明節の時、風がおだやかで日差しも心地よく、花木は美しかった。金華の王叔善父・四明の兪紹芳・同郷の范誠之そして私が一人の従者を従え、(その従者)に酒と酒肴を携えさせて城西に出かけた。かくしてかつての皇帝が創建した大承天護聖寺を観覧し、寿安香山に行って景色を見て帰った。[30]

元統二年(一三三四)の清明節に、かねてから関心を抱いていた大都西北郊外の西山へピクニックに向かったという。初めの目的地は西山であったが、その途次に大承天護聖寺にも立ち寄っている。大都の住民にとって、西山に向かう途中に位置する大承天護聖寺は恰好の行楽地であったに違いない。

このように、信仰の対象としての空間だけに止まらない役割をも寺観は担った。ここではそうした点を鑑みて、信仰以外で寺観の果たした機能面を紹介していく。

(1) 儀式のリハーサル会場

まず、政府がどのように寺院を利用したのかについて考えてみたい。必ずしも一般的な事例とはいえないが、国家儀礼の予行演習の会場として利用されたことは興味深い。それは、前述した大都城のランドマークたる大聖寿万安寺である。

『元史』巻五一、五行志二、火不炎上には、「此の寺旧名は白塔、世祖より以来、百官儀を習ふの所なり」とある。また、『元史』巻六七、礼楽志一「元正受朝儀」によると、「期に前んずる三日、儀を聖寿万安寺に習ふ」とあって、毎年正月の朝賀の儀礼に合わせてその三日前に予行演習が行われたという。さらにここでは、「天寿聖節受朝儀」「郊廟礼成受賀儀」「皇帝即位受朝儀」の予行演習も行われた。いずれも国家の根幹に関わる儀礼である。

元代に限らず、伝統中国における儀礼では、号令によって「拝」「礼」「舞踏」などの所作を何度も繰り返すため、事前に広大な敷地を有する寺観で一定の練習を積む必要があったとみられる。[31]

(2) 皇族による利用

次に、皇族によって寺院が絵画展示会の会場として利用された事例を紹介したい。

武宗の妹であり、仁宗の姉に祥哥剌吉と呼ばれた公主がいる。彼女は膨大な書画コレクションを所蔵していたことで知られ、至治三年（一三二三）三月に自身のコレクションの展示会が開催された。その模様は、会への参加を許された袁桷の手になる『清容居士集』巻四五「魯国大長公主図画記」に詳しい。

至治三年三月の甲寅、魯国大長公主が中書省の役人・執政官・翰林院・集賢院・国子監の然るべき官位にある者を集めて、南城の天慶寺に集合させた。秘書監丞の李某に命じてこの会を取り仕切らせ、公主の属僚もこれに参加して手伝いをさせた。食器は美しく、酒器も清潔で、酒を強引に飲ませることはない。官員がひしめきあい、山海の珍味がことごとく集まり、飲酒礼に則ってそれぞれが歓を尽くし、互いに酒を酌み交わして、勝手に振る舞う者はいなかった。宴たけなわとなって、図画若干巻を取り出し、その得意とする所にしたがって、絵の後ろに跋文を書くように命じられた。飲酒礼が終わり、さらに文詞の巧みな者に命じて、その歳月を記して、来世に伝えさせようとした。[32]

引用部分の前後によると、出席者は官僚が二十余人で、展示に供された書画は約四十点、法書は五点であった。会は山海の珍味が供される宴会から始まり、宴たけなわとなったところで、おもむろに絵画が展示され、参加者がその絵画の題跋を記したという。そして、この会の催された場所が南城の天慶寺である。天慶寺が王室と関係の深い寺院であったことは以前に拙稿で触れた。[33] こうした催し物が開催されたことも皇室との関係を示唆していよう。

（3）市場としての機能

最後に、機能としては最も一般的なものと考えられる、商業空間としての役割について考えていきたい。

北宋開封の相国寺の事例でも知られるように、[34] 人々が多数集まる寺観では廟会とよばれた定期市が開催された。とくに大護国仁王寺（西鎮国寺のこと）で二月八日に開催された大法会については、すでに中村淳・乙坂智子両氏の研究に詳しい。[35] いまそこでも紹介されている『析津志輯佚』「歳紀」（二一四頁）に改めて依拠すれば、

寺の両廊に販売所が立ち並び甚だ泰平であった。全国のありとあらゆる物であふれ、とても賑やかであった。中で商賈の開帳することは錦のようで、すべてこの日より始まった。……ほとんどは江南からの富商であって、国内外の珍しいものはすべてそろっていた。これもまた年中行事の一つである。酒食の店舗が開設されることも江南と同様である。[36]

という。江南からの富裕な客商が、この法会を参観する人たちを相手に商売を繰り広げたのであろう。通常の商業活動とは別のこうした商行為も、大都での営利活動の一環でもあった。

東嶽廟について『析津志輯佚』「歳紀」（二一七頁）には、

（三月）二十八日、岳帝王の生辰で、二月より始まり、大都の士庶官員・諸色婦人がこぞって、お礼参り・お参りをする人が途切れることなく、その上で拝礼を行う者がいた。とくにこの三日が一番盛大であり、沿道にはあらゆる花果・餅食・酒飯・香紙を販売する店舗がひしめき、また盛会であった。[37]

とあって、東嶽大帝の生誕節を祝う祭りが繰り広げられたことを示す。そこでは食事や果物を販売する屋台も繰り出され、賑やかな光景が繰り広げられた。

さらに南城に位置した白雲観についても『析津志輯佚』「歳紀」（二一三頁）に記述がある。

（正月）十九日に至り、都城の人はこれを燕九節と言った。大都の士女は竹杖をたずさえ、ともに南城の長春宮・白雲観に赴き、宮観で法事や焼香を済ませると、それぞれが思い思いに楽しみ、この日が賑やかであることは、まるで昔日の風紀のようである。[38]

これは長春真人の生誕節が正月十九日であったことにもとづく。ここで商売が行われたとは具体的には記されていないものの、当然他の廟会と同じような光景が繰り広げられたことであろう。なお、東嶽廟と白雲観の廟会は元代より現在に至るまで継承されている。

以上見てきたように、都城における寺観の果たした役割は信仰の対象とそれに伴う観光地というだけではなく、他にも多様な機能を有していたのであった。なお本稿の主旨とはいささか乖離するが、時期的な問題でいえば、数は少ないながらも、文宗期に多くの寺院が建設されたことは注目される。これは、文宗が元代の皇帝の中でも、仏教に対してとりわけ手厚い保護を行ったからであろう。[39] 皇家仏寺以外にも、皇帝の特定宗教への傾倒と大都城における寺観の建設、そしてそれによって生じる景観の変遷との相関関係は興味深い課題である。[40]

おわりに

本稿では、はじめに大都に置かれた寺観の設置年代と場所の検証から、その場所が南城に近い皇城の西部に集中する傾向を確認し得た。ついで寺観が建設されるにあたっての背景を確認し、最後に大都城内におかれた寺観の果たした機能について考察を加えた。

冒頭で述べたように、以前に発表した拙稿では、科挙が開始された元代中期の状況から、大都城の開発の方向が南から北に向かって行くと推測した。本稿で得られた結論からも、開発の方向が南側から北側に向かっていくということは改めて補強できた。さらに加えて、大都城の中心部よりも北側にまで開発の手が及ばなかったと結論づけることも許容されよう。その上で最後に二つの点を指摘し、本稿の結びとしたい。

一点目として、繰り返しの指摘にはなるものの、数多くの寺観が存在した南城の重要性である。ここでは紹介しなかったが、元代に入ってからも南城には寺観が建設された。これは、多数の人間が元末まで南城に居住していたことを示す。加えてこの南城の存在に既定され、大都城でもその西南部に多くの寺観が建設された。この事実は南城の存在が大都にとっての補完的機能を有する都市として、重要な役割を果たしていたことを改めて裏づける。

二点目は、大都城の開発の方向である。この方向の問題は元の大都から明初の北京を考える上で見逃せない重要な論点である。本稿で挙げたように、建設年代と場所が一致する事例は必ずしも充分な数とはいえまい。しかしながら、この少ない数であってさえも、元代において開発の手は大都城の北半にまで及ぶことはなかったことが予測されるのである。

本稿で得られた結論を踏まえれば、次に引用する杉山正明氏の推論はおおむね正鵠を射ている。

大都北半市街区は、いわば石灰をひいたまま、結局は人が入居しなかったと見ていいのではないか。大都は都市機能が南半に集中していて、北半はすこぶる市民生活に不便である。(11)

「いわば石灰をひいたまま」という箇所の趣旨は、区画整理のための作業に止まったと述べたかったのではないかと推測されるが、論拠が提示されておらず、どのような史料にもとづいての言及かは疑問とせねばならない。しかし、本稿の検証によって、この見通しが実証された形になった。さらには、大都の北半が無人の地であったであろうという推測は次に紹介する明代の北京改造工事と併せて考えると説得力が増す。

明代に入り北京は大改造を遂げる。まず、洪武帝期の将軍徐達によって城の北側が放棄され、城壁は南に約二・五キロメートル移動する。大都が南北に長い長方形であったのに対して、この時点で大都城の北側約三分の一が切り捨てられ、ほぼ正方形となった。次いで永楽十七年（一四一九）になると、城壁を南に一キロメートル拡張する。これによりほぼ正方形でかつ皇城が中心に据えられた国都が現

出した形になる。[42] これは元代においてすでに住民が居住していなかったために、そうした措置を行っても問題が生じなかったからであろう。

本稿では寺観の設置年代に注意を払い、大都城の開発の方向について以前述べた見通しを改めて確認した。本稿で得られた結論をより強固なものにするためには、大都城に置かれたあらゆる建築物の建築年代と場所について検証する必要がある。さらに、寺観に限らず宗教施設が首都において果たした役割については、また改めて検討しなければならない事柄である。とくに後者の問題は、首都を形成する要素として、妹尾達彦氏によって挙げられているものの一つである。[43] いずれも稿を改めて検討を加えていきたい。

註

(1) 拙稿「元代の大都南城について」(『集刊東洋学』八二、一九九九年)を参照。本稿でもこれまでと同様に、金代からの中都城を「南城」と表記し、「南城」「大都城」と記した場合、それぞれ城壁に囲まれた当該の空間を指す。従って、「大都」はこの二つを包括した空間を指すことになる。

(2) 拙稿「元大都形成過程における至元二十年九月令の意義」(『集刊東洋学』九一、二〇〇四年)を参照。

(3) 拙稿「科挙制よりみた元の大都」(『宋代史研究会研究報告第九集「宋代中国」の相対化』汲古書院、二〇〇九年)を参照。

(4) 大都における寺観に関する古典的研究として、王璧文「元大都寺観廟宇建置沿革表」(『中国営造学社彙刊』六―四、一九三七年)がある。これは資料を網羅的に紹介した、いわば資料集ともよべるものであるが、現在にいたるも必読文献といえる。ほかにも多くの研究があり、特に研究が積み重ねられてきた皇家仏寺の研究については後掲註(19)で紹介する。それ以外の研究をここで挙げておく。仏教史からの研究としては、竺沙雅章「元代華北の華厳宗――行育とその後継者たち」(『南都仏教』七四・七五合併号、一九九七年、のち『宋元仏教文化史研究』汲古書院、二〇〇〇年所収)、同「燕京・大都の華厳宗――宝集寺と崇国寺の僧たち」(『大谷大学史学論究』六、二〇〇〇年、のち『宋元仏教文化史研究』所収)を参照。建築史の分野から内部構造を分析したものとして、福田美穂「元朝の皇室が造営した寺院――チベット系要素と中国系要素の融合」(『種智院大学研究紀要』九、二〇〇八年)がある。一方で道観についての研究が必ずしも多いとは言えない状況にあって、櫻井智美「元大都的東岳廟建設与祭祀」(『元史論叢』一三、二〇一〇年)は、大都における東嶽廟の営建過程と太一教について検討を加えている。

(5) こうした史料の細かな紹介は省略する。ただし、本稿をなすにあたって利用した版だけを記しておく。本稿で最も多く利用することになる『析津志輯佚』は、北京図書館善本組輯『析津志輯佚』(北京古籍出版社、一九八三年)を利用することとして、頁数もそれによる。『大元一統志』は、趙万

里（整理）『元一統志』（汲古書院影印、一九七〇年）、『大元混一方輿勝覧』は郭声波（整理）『大元混一方輿勝覧（宋元地理志叢刊）』（四川大学出版社、二〇〇三年）をそれぞれ利用した。『永楽大典』所引『順天府志』は、光緒十二年（一八八六）に繆荃孫が『永楽大典』より『順天府』の部分を抄録したものである。現在は、影印版の『順天府志』（北京大学出版社、一九八三年）が広く普及している。本稿でもこの版を利用した。

(6)　王岡『北京城市発展史（元代巻）』（北京燕山出版社、二〇〇八年）一一二～一二三頁、一二八～一三五頁を参照。

(7)　前掲註（1）拙稿「元代の大都南城について」を参照。

(8)　崇聖寺については、『永楽大典』所引『順天府志』に「崇聖寺在咸寧坊。至元五年建。」とあり、極楽寺については、『日下旧聞考』巻五四所引『順天府志』に「極楽寺在崇教北坊。元至元間建。」とそれぞれ記される。

(9)　前掲註（2）拙稿「元大都形成過程における至元二十年九月令の意義」を参照。

(10)　前掲註（4）櫻井智美「元大都的東岳廟建設与祭祀」を参照。

(11)　斉化門外有東嶽行宮、此処昔日香燭酒紙最為利。蓋江南・直沽海道、来自通州者、多於城外居止、趨之者如帰。又漕運歳儲、多所交易、居民殷実。

(12)　斉化門をめぐって社会経済の面から検討した、王暁欣「元代史料中的大都斉化門及相関問題芻議」（『元史論叢』一二、二〇一〇年）は各門の役割を考える上で興味深い視点からの研究である。

(13)　『順天府志』巻七「寺」。万寧寺在金台坊。旧当城之中、故其閣名中心。今在城之正北。

(14)　前掲註（2）拙稿「元大都形成過程における至元二十年九月令の意義」を参照。

(15)　『元史』巻一三、至元二十二年二月壬戌の條。

(16)　京師寅賓里有無量寿庵者、居士屠君所建也。…（至元）廿有一年、出已貲七百貫、買地十畝於太廟之西、作無量寿庵。樹仏殿四楹。屋宇象設、無不具足。浚井治圃、手植嘉木。

(17)　大都城における宮城の営建過程については、拙稿「元大都的宮殿建設」（『元史論叢』一三、二〇一〇年）で論じた。

(18)　前掲註（3）拙稿「科挙制よりみた元の大都」を参照。

(19)　皇帝の命令によって建設された仏寺――先行研究では「皇家仏寺」「勅建寺院」と称される。本稿では「皇家仏寺」を使用する――が注目されてきた。これについては、多くの先行研究があり、陳高華「元大都的皇家佛寺」（『世界宗教研究』一九九二―二、のち『元朝史事新証』蘭州大学出版社、二〇一〇年所収）、中村淳「元代大都の勅建寺院をめぐって」（『東洋史研究』五八―一、一九九九年）とそこに引用される研究、石濱裕美子「パクパの著作に見るフビライ政権最初期の燕京地区の状況について」（『史滴』二四、二〇〇二年）等を参照した。

(20)　この仏寺について、『永楽大典』所引『順天府志』は「黒塔は大天源延聖寺に在り。太平坊。」と記す。そして、『元史』巻三〇、泰定三年二月丙申の條には、「顕宗の神御殿を廬師

寺に建つ。賜額して大天源延聖寺と曰ふ」とあり、神御殿を廬師寺に建置し、そこを大天源延聖寺と改称したという。ところで清代に編まれた『日下旧聞考』巻一〇四、郊坰は、『帝京景物略』巻六「西山上」の、廬師寺は西山に存在したという記録にもとづき、大天源延聖寺が西山にあったとする。だが、顕宗カマラの神御殿が置かれたという事実と、仏教に傾倒した文宗のパーソナリティーを鑑みれば、やはりこれは大都城内に建設されたとみなすべきであろう。

(21) 拙稿「元朝の大都留守段貞の活動」(『歴史』九八、二〇〇二年)で、その建設過程に段貞の関与があったのではないかと推測した。

(22) 『元史』巻四七、至正二十八年六月甲寅の條、同巻五一、五行志一。

(23) 現在は、北京市仏教教会の敷地となっており未開放地区である。李路珂他(編著)『北京市古建築地図(上)』(清華大学出版社、二〇〇九年)三〇二頁を参照。

(24) 崇国寺に関連する石刻資料・文献史料は、前掲註(4)竺沙雅章「燕京・大都の華厳宗」にまとめられている。本稿でもそれを参照した。

(25) 大都妙善寺比丘尼舎藍藍八哈石卒。師諱舎藍藍、高昌人。……成宗之世、事皇太后於西宮、以侍従既久勤労之多、詔礼帝師迦羅斯巴斡即児為師、薙染為尼。……仁宗之世、……詔居妙善寺、以時入見。賜予之物不可勝紀。師以其物剏寺於京師、曰妙善。……至順三年二月廿一日歿。年六十四。

(26) 元代の高麗人の大都における活動については、陳高華「『稼亭集』『牧隠稿』与元史研究」(『蒙元史暨民族史論集』社会科学文献出版社、二〇〇六年、のち『元朝史事新証』蘭州大学出版社、二〇一〇年所収)を参照。

(27) 延祐丁巳、高麗国王諱某既釈位、留京師邸、買地於故城彰義門之外、創梵刹焉。越三年己未、工告畢。凡奉仏居僧之所・修斎作法之具、百需皆有。揭名曰大報恩光教寺。

(28) 『元史』巻八、至元十一年十二月癸亥の條、王惲『秋澗先生大全文集』巻四七「太一五祖演化貞常真人行状」。

(29) 前掲註(4)櫻井智美「元大都的東岳廟建設与祭祀」を参照。

(30) 客京師三年、聞西山之勝、未至焉。乃元統二年二月二十五日、為清明節、風和景舒、花木妍麗、金華王叔善父・四明兪紹芳・同里范誠之与予、従一小蒼頭載酒殽共出遊城西。遂至先皇帝所創大承天護聖寺縱観、行望寿安香山而還。

(31) 実際、入明僧の記録にも、正月の儀礼にあわせて、朝天宮において十二月二十七日に予行演習を行う様子が書き留められている。村井章介・須田牧子(編)『笑雲入明記――日本僧の見た明代中国』(平凡社東洋文庫、二〇一〇年)一〇八頁を参照。儀礼の場で、いわば恥をかかないためにも、練習が必要であったとみられる。

(32) 至治三年三月甲寅、魯国大長公主集中書議事・執政官・翰林・集賢・成均之在位者、悉会於南城之天慶寺。命秘書監丞李某為之主、其王府之寮来悉以佐執事。籩豆静嘉、尊斝絜清、酒不強飲。簪佩雑錯、水陸畢湊、各執礼尽歓、以承飲賜、而莫敢自恣。酒闌、出図画若干巻、命随其所能、俾識于後。礼

成、復命能文詞者、叙其歳月、以昭示来世。

(33) 前掲註(21)拙稿「元朝の大都留守段貞の活動」を参照。

(34) 北宋の相国寺の賑わいについては、入谷義高・梅原郁〔訳注〕『東京夢華録――宋代の都市と生活』（平凡社東洋文庫、一九九六年）一〇九～一一八頁を参照。

(35) 中村淳「元代法旨に見える歴代帝師の居所――大都の花園大寺と大護国仁王寺」（『待兼山論叢（史学）』二七、一九九三年）、乙坂智子「元大都の游皇城――『与民同楽』の都市祭典」（今谷明〔編〕『王権と都市』思文閣出版社、二〇〇八年）を参照。

(36) 寺之両廊買売富甚太平。皆南北・川広精餡之貨、最為饒盛。於内商賈開帳如錦、咸於是日。……多是江南富商、海内珍奇無不湊集。此亦年例故事。開酒食肆与江南無異。

(37) （三月）二十八日、乃嶽帝王生辰、自二月起、傾城士庶官員・諸色婦人、酔還歩拝与焼香者不絶、尤莫盛於是三日、道途買売、諸般花果・餅食・酒飯・香紙塡塞街道、亦盛会也。

(38) 至十九日、都城人謂之燕九節。傾城士女曳竹杖、倶往南城長春宮・白雲観、宮観歳揚法事、焼香、縦情宴玩、以為盛節、猶有昔日風紀

(39) こうした文宗の仏教信仰の様相については、野口善敬「元代文宗期における仏教興隆」（『香椎潟』四九、二〇〇三年、のち『元代禅宗史研究』禅文化研究所、二〇〇五年所収）を参照。

(40) これは元の大都に限ったことではない。宗教施設が中国歴代の国都においてどのような位置を占めたのかは、その都市景観の変貌と絡めて論じる必要がある。たとえば、北宋開封では、皇帝による道教に対する帰依の結果として、巨大な道観がいくつか建設された。とくに徽宗の時代はその代表といえよう。徽宗時代の北宋開封の改造については、久保田和男「北宋徽宗時代と首都開封」（『東洋史研究』六三―四、二〇〇五年、のち『宋代開封の研究』汲古書院、二〇〇七年所収）を参照。

(41) 杉山正明「クビライと大都――モンゴル型『首都圏』と世界帝都」（梅原郁〔編〕『中国近世の都市と文化』京都大学人文科学研究所、一九八四年、のち副題を付して『モンゴル帝国と大元ウルス』京都大学学術出版会、二〇〇四年所収）一五七頁を参照。

(42) 明初に行われた北京改造工事については、新宮学「明代の首都北京の都市人口について」（『山形大学史学論集』一一、一九九一年）を参照。

(43) 妹尾達彦「中国の都城とアジア世界」（『シリーズ都市・建築・歴史（一）記念的建造物の成立』東京大学出版会、二〇〇六年）では、都城に建設された王権を象徴する建築物として、王や元首の宮殿や中央官庁、神々を祀る宗教建築、都城を囲む城壁や倉庫等の軍事・財政施設、街路、市場、政府高官の邸宅を挙げている。こうしたものが元の大都においてどのような意味を有するのかについて、今後研究を進めていきたい。